

〈研究ノート〉

日本特殊論を超える試み

石 積 勝

はじめに

1984年の現在、いわゆる日本論・日本人論ブームは一向に衰えを見せず、諸外国、特に欧米において発行される日本関係の書籍数は急増し、映像文化の中に占める「日本」の比重も急上昇の気運にある。国内外における、こうした日本論の流行¹は、経済的成功を背景とした日本の国際社会における地位向上の反映として捉えられるが、国内で進行しつつある経済大国から政治大国への転換と自負があいまって、この日本人論ブーム、ここ当分低落の可能性はありそうにもない。

さて、国外における日本論には量的増加とともに内容的推移も見られる。例えば米国の場合、60年代から70年代には戦後日本の経済面での成功を反映し、日本礼賛型の日本論が風靡した。(H・カーン² E・ボーゲル³ W・オオウチ⁴ 等々、枚挙にいとまがない。)しかし最近では日本社会の特殊性に視点を定める⁵と同時に、日本を脅威として意識し、日本社会の弱点と暗部を鋭く暴露することをその主眼とする日本論⁶が増加しつつある。こうした日本論の内容的変化は看過出来ない問題をはらんでいると言えよう。

即ち、日米・日欧の貿易摩擦が、いよいよ文化摩擦、文化戦の様相⁷を呈しつつある中で、欧米マスコミ等の対日批判は、そうした日本論に触発され、感化されながら、その標的を、いわゆる非関税障壁から日本の社会や文化の構造そのものに向けつつあるのである。そこでは、特異と規定される日本のビジネスや人間関係を単に特異のみならず、国際的基準に照らし、アンフェアであり、究極的には受け入れがたいものであるとする主張が見受けられるのである。そもそもアンフェアという語義の、例えば日米における概念的相異点がいかなるものであるかを究明することが重要と考えられるが、⁸それはともかく、日本をとりまく文化摩擦が進行する中で、さらに指摘すべき問題が2点ある。

まず留意すべきは、欧米産の日本社会についてのイメージが、第三世界においても定着しつつあることであろう。即ち、国際連合等における新国際情報秩序の議論の中で繰り返し強調されるように、世界規模での情報寡占体制⁹が確立されており、そこでは欧米の報道機関が持ち込む日本社会についての分析・批判も、欧米からの視点であることの注釈なしに、そのままの形で受け入れられ、増幅されつつある。欧米において、いわばキャッチ・フレーズとなりつつある“日本アンフェア”論も、第三世界の各々の国と日本との個別な関係・状況にかかわりなく、一般化され、定着しようとしているが、¹⁰この点については、我が国ではほとんど注意が払われていない。

さらに指摘すべきは、情報をめぐっての欧米諸国との間における極端な入超現象であろう。明治以降、近代化＝西洋化と規定し、「追いつき、追い越す」ために、もっぱら西洋事情の吸収に熱中してきた中で、情報の入超現象¹¹は、我が国の近代化推進においては当然の帰結であり、むしろ誇るべき現象でもあった。しかしながら、上述の文化摩擦の観点から見れば、こうした事態の我が国にとっての国際政治・国際経済上の意味あいはいは全く異なったものとなりつつあると言えよう。量的劣勢を埋めるべく、的確に効果的に我が国に

についてのイメージを我々自身が外に向け発信する時期に来ているとは言えまいか。

上述のごとき状況の下、日本という社会集団のイメージを規定し続けてきた過去の日本論の検討を通じ、新たな日本論を展開し、内外に問うことは我々に課せられた急務であり、それは政策科学的意味あいをも含む重要性を持つと言えよう。このような問題意識に立脚し、ここでは次の3点について考察してみたい。第1、日本論の系譜に関する若干の考察。即ち、過去の日本論（特に米国のそれ）をその世代的変遷を中心に概観する。と同時に在来の日本論を対象化し、そこに内包される問題に光をあてんとする“日本研究の研究”者たちの議論を検討する。第2、「日本論の論」の代表的な例として、ダグラス・ラミス氏の『「菊と刀」再考』をとりあげ、より具体的に内包される問題を明らかにせんとする。第3、上記の日本論の問題点を乗り越える糸口として、神島二郎氏の日本政治・日本社会分析の方法論を検討し、新たな日本論構築の可能性を探りたい。

I 日本論の系譜と「日本研究の研究者」たちの発言

過去の日本論を概観する場合、それは様々な角度から可能であろうが、¹²ここでは世代論的な観点から日本論の系譜を追ひ、過去の日本論に流れる一般的特徴を考察してみたい。例として日本文学研究者ドナルド・キーン氏の考察を見てみよう。¹³

氏は過去の日本論に決定的役割を演じた、欧米を中心とする所謂ジャパノロジストたちを三世代に区分けし、¹⁴各世代を次のように特徴づける。第一世代は幕末以来第二次大戦勃発までの約80年間の日本研究者を含み、¹⁵彼らの研究は特定・専門化していないという。¹⁶第二世代では米国のジャパノロジストたちが中心となるがこのグループは研究分野の特定化が顕著であると指摘される。¹⁷さらに第三世代日本研究者は、より一層の専門化・細分化をその傾向として抱きつつ、次の2点で、第一、第二世代と明確に異なっているという。

それは第1に、彼らが、例えば文学・歴史研究者に限った場合でも、専門領域以外の歴史論・宗教論などに関する学識を有しており、日本の文学作品について論ずる場合でも、国際的価値基準なるものを当然のこととしてあてがっているという点である。¹⁸第2には日本的な現象を日本文化という特殊的な背景を持つユニークな現象として受けとめるのではなく、世界のどこでも見られる現象として普遍的に捉えようと試みている点であるという。¹⁹キーン氏は上述のごとくジャパノロジーの世代論を論ずるが、氏の第三世代についての特徴づけは、近來とみにその発言が注目される「日本研究の研究者」たちの視点とも符号する。

日本研究の研究に関する特集ないしは論文で、今年筆者の目に入ったものだけでも、『諸君』2月号（まさしく「日本研究の研究」と題した特集）、『思想の科学』2月号（「日本人論の落とし穴」と題した特集）、『現代思想』7月号総特集「日本の根っ子」、『中央公論』誌上での永井陽之助氏²⁰や西尾幹二氏の発言²¹等と枚挙にいとまがない。そうした発言者たちの問題意識の根底に流れるものは、『思想の科学』誌上にも登場する杉本氏の著『日本人は日本的か』の副題が「特殊論を超え、多元的分析へ」であるように、また永井氏の『中央公論』論文が「日本にこだわらない日本論を」であるように、第一・第二世代（さらに第三世代の相当部分）を通して続く日本的例外主義の終焉に関するものである。彼らの共通した視点は、今までの外からの日本論が、そしてそれらの日本論と奇妙な連関を持つ国内版日本論²²の多くが、日

本の文化的・社会的特異性を肯定的にせよ、否定的にせよ、強調すると見ることにある。

永井氏は前述の第二世代にあたる日本論を戦後第一期・戦後第二期と分けて考察するが、第一期のそれは日本の文化的特異性や前近代性を、克服されるべき対象と見做し、逆に戦後第二期の日本論では、もはや文化的特異性が克服されるべき対象ではなく、まさにそれゆえに、つまり文化的特異性に立脚する人間関係が存在するからこそ、日本の経済的成功があったとする説明がなされ、主流になったと見る。²³これに対して現在急速に台頭しつつある第三世代のアプローチには、日本の経済・社会・政治を静態的な定型として捉えるのではなく、多くの矛盾をはらみながら急速に変化しつつある動態的な過程として捉えようとする共通の特徴が見られるというのである。²⁴永井氏はこのような観点から、第三世代の日本論を、戦後第一・第二期の「再確認理論」²⁵に対して、「発展理論」²⁶と性格づけるのである。

永井氏同様、台頭する第三世代の日本研究者を積極的に評価しつつ、池田雅之氏、杉本良夫氏らは過去の日本人論、特に欧米人の手になる日本観をつぶさに検討し、彼らの日本についてのイメージの淵源が一貫して逆しまの異境²⁷であることをつきとめる。さらに、それが現在の種々雑多な日本論の中に「日本の特殊性」として見えかくれすることが問題であると指摘するが、この指摘はヨーロッパにおける日本研究の研究者、E・ウィルキンソン氏の日欧イメージ・ギャップを扱った著『誤解』にも共通するテーマ²⁸でもある。また、西尾幹二氏は日欧文化摩擦の真只中に身を置く者の視点から、問題の根源は現代に脈うつ西欧からの繰り返される日本特殊説以上に、日本人自身が内外に喧伝するエキゾチズム文化紹介にあるとし、具体的な広報活動の基本的変更を緊急の課題として提起する。²⁹

さて、このような日本特殊説は、異文化との接触体験を持った者たちの実は極めて都合の良い認識の結果であり、その根底には自文化中心主義的発想があると考えられるが、³⁰そのような日本特殊説をその中に内包しつつも、日本を最も鋭く明快に、総体的に捉え、したがって、研究者・一般読者を問わず最も影響力を持った日本人論が、ルース・ベネディクトの『菊と刀』であったことは衆目の一致するところであろう。第一・第二世代に通底する逆しまな日本論を、そのイデオロギー性をも含めて発き出す作業は、恐らくこの『菊と刀』の総合的な批判をまって初めて十分な意味を持ち得るであろう。日本論パラダイムの組み換え作業を開始するにあたり、『菊と刀』の持つ意味を批判的に検討しようとする一つの試みがダグラス・ラミス氏の『「菊と刀」再考』である。

II 『「菊と刀」再考』

ベネディクトの『菊と刀』が、外国人の手によって書かれた日本論の最高の傑作の一つである点については異論はあるまい。『菊と刀』は戦後一貫して日本学の古典中の古典として君臨し続けてきた。ところで、一度も日本を訪れたことのない学者の手になり、細部に関しては明らかな誤謬も散見されるこの著が、なぜこれほどの説得力を持ち、古典中の古典となり得るのか。筆者同様、ラミス氏もこの点に悩まされる。氏が『菊と刀』との格闘の末にたどりつく解答は次の2点に集約される。即ち、第1にベネディクトの詩人としての才能。第2に『菊と刀』の持つ政治文学性である。

まずベネディクトの詩人としての才能は、その簡潔・明解で容易に記憶できる修辭的表

現にいかんなく発揮されている。彼女がなぜ日本の歴史を無視し、各時代の資料をアトラングダムに駆使して日本論を構築し、しかもそうした方法論上の明らかな弱点に無頓着でいられたのか、和辻哲郎をはじめとして、この点を問うた者は多いが、その理由はベネディクトの著作に通底するキーワード、「型」に求められよう。つまり彼女の偉大な才能は、様々な細いデータを寄せ集め、それをいきいきとして系統的な、しかもこみ入った型に配列するところにあり、そこには偉大な研究者というよりは、創造的な詩人の精神が見られるのではなかろうか。³¹それゆえにこそ、このアン・シングルトン（ベネディクトの詩人としてのペンネーム）なる詩人の著作は、読後、通常の社会科学書とは異なる不思議な精神の高揚を与えるのである。それでは、この偉大な詩人の描き出す日本は、いかなるものだったのだろうか。その中に含まれる政治文学性、つまりイデオロギー性の中味はどのようなものであったのだろうか。

『菊と刀』に描かれる日本は、ラミスの言葉を借りれば、「終りをつげた生命」³²であり、『菊と刀』は日本文化への墓碑銘、つまり一種の死亡記事なのだという。³³ここで、我々はマーガレット・ミードがベネディクトの伝記の序文に寄せた次の一文を想起せざるを得ない。「この本（『菊と刀』）はどの順序で読まれてもよい。終りを遂げた生命は、すべてが同時にみられる。」³⁴即ち『菊と刀』に描かれる日本文化は、「萎縮した人格の悪臭が充満する文化の型の完璧な表現であり、この全体主義（型）文化では、ひとりの抑圧者もいなければ、いかなる政治的抑圧者もなく、個々の日本人が自ら自己抑制のメカニズムとなっているという。そこでは自由を愛する心は、人びとにとって全く未知のものであるからして、押え込む必要はない。ドイツでは全体主義は特定の政治体制だが、日本では文化そのものの基盤であり、全体主義者であることと日本人であることは同じことになる。」³⁵

こうした日本文化＝全体主義という図式は、現在、種々の文化摩擦が進行する中で、諸外国で繰り返される日本性悪論の中心的テーマとなっている。まさにこの点については事態は不変なのであり、今や日本ビジネスマンが、日本全体主義（Japan Inc.）の先兵として世界を駆け廻るというわけであるが、それはともかく、この『菊と刀』は戦後の日米関係のイデオロギーの理論的基盤を作ることになったのであり、その意味は甚大である。

つまり、この本が密かに主張するのは、全体主義国日本の敗北はむしろ（アメリカによる）非常な恩恵であったということ。同時に、民主主義と自由を真剣に求める人びとは、自らの伝統に背を向け、（なぜなら日本社会の伝統的型こそ、ほうむり去られてしかるべき運命にあるのだから）西洋・特に米国に頼らねばならないということだったのである。こうした中で、日本の民族的伝統と自覚を守ろうとする人々は、旧態然とした軍国主義時代のイデオロギーを採用しなければならぬことになってしまったわけである。戦争直後におけるこの二者択一的な選択は、戦争一般につきものとはいえ、『菊と刀』の影響力にかんがみて、そうした状況に決定的な拍車をかけたことは十分に予想でき、その意味で『菊と刀』の政治文学としての効果は絶大であったと言わざるを得ない。

この占領政策的観点は今日でも大きな力を持ち、ラミスの観察によれば、「一方では胸にハーバード大学と染めぬかれたTシャツを着た東大生という悲喜劇のみもの」によって、この種のメンタリティーが象徴化され、他方では「ドイツ風の軍服を着て伝統ある日本精神の名において切腹した三島由紀夫の悲喜劇」にも象徴的にあらわれているという。³⁶

さらに、この二者択一的な強制作用とも言うべきものの戦後の日本人論に与えた甚大な

る影響も指摘できよう。即ち、「ハーバード大のTシャツと三島由紀夫の軍服」と同様なレベルでの日本論における二者択一が、戦後の内外の日本人論の底流にあり、そこでは、メトロノームの振り子よろしく、日本文化否定と賛美が大きく揺れ動き、同時にそれはアメリカと日本との比較のステレオタイプ化に決定的な影響を与えたと考えられる。つまり日本が何んであれ、アメリカは常に正反対に置かれることになり、「感情的」対「理性的」、「恥の文化」対「罪の文化」、「タテ社会」対「ヨコ社会」、「義理」対「権利」、「団体主義」対「個々主義」等々の比較の図式が繰り返された。³⁷

勿論、日本を「正反対の国」と見る見方はラフィカディオ・ハーンを含む19世紀ヨーロッパ人観察者まで逆のぼることが出来る。(前述のごとく、池田雅之氏や、E・ウィルキンソン氏らの意欲的研究がこの問題に光をあてる。)³⁸さらにこうした比較が全く役に立たないとは考えられない。しかしここでの問題は日本論の論にある。即ちベネディクトに代表される二者択一的アプローチ(その根底にはアメリカを超歴史的——進歩——合理化——近代化——民主化——の代表ないしはエージェントとして見る暗黙の了解が存在する。)³⁹が持った戦後日本社会における重要な社会的機能に注目せざるを得ないのである。つまり米国は手本としてあおぎ、追いつかなければならない対象であると同時に、永遠に追いつけない国、ファンタジーランドとしての意味を持つ国となり、この米国神話は、日本と想像上のアメリカとを静的に比較する幾多の日本論を生み出したと言えよう。

さて逆に、米国の側におけるこの日本を正反対の国として見る社会的機能はいかなるものだったのだろうか。それは自文化への自信を強化・確認する機能から、やがて「なぐさめ」ともいうべきものに変化したのではなかろうか。つまり、日本の経済的成功とその経営システムのカギは、「伝統」と「近代性」のすばらしい混合物だといわれるわけだが、そして日本企業の感情的なつながり——団体精神、親分子分関係、家意識、タテ社会の伝統、という繰り返される神話が、経済的成功という結果によって余りに見事に保障されると、今度は結局のところその日本的社會自体、彼ら(アメリカ人)の受け入れられる自由や、個人や、明るさといったものを創出しなかったという、つまりあの息のつまる制度からの解放を日本近代化はなし得なかったということになり、それが米国人自身にとっては、自文化の価値的優位を自己確認するというなぐさめともいうべき機能を持つことになる。まさしく、最近の「日本礼賛型」から「日本の陰謀型」への米国における日本論の内容的変化は、日本人論が、米国人の自らへのなぐさめとしての機能をいよいよはっきりと担わざるを得なくなってきた状況の出現を反映している。そこには、同じ日本特殊説でも、エキゾチシズム日本から全体主義国家日本の強調へと微妙な変化が見られるとも言えよう。

III 新たな日本論構築への視点

さて杉本良夫氏や、池田雅之氏や、ダグラス・ラミス氏が果敢に行う、これまでの日本人論の中にあるイデオロギー性の暴露、批判を継承する形での新たな日本論の構築はどのような構造を持たなければならないのだろうか。日本論の良質部分の動きが日本特殊説からの自らの解放をその基本に置くとしても、日本それ自体ととりくむ中では、過去の問題性を意識し拒否するだけでは積極的な展開はあり得ない。今や我々は、日本論の論をつぶさに追い続けながら、一方で新たな日本論そのものを構築する必要に迫られていると言え

る。しかしそのヒントはどこに見い出されるべきなのか。

たしかに、永井陽之助氏の言うように、日本の存在を特異でもなく、例外でもなく、奇跡でもなく位置付ける日本研究者が多数あらわれ、「日本例外主義」が終りを告げつつあるかも知れない。⁴⁰さらにまた杉本氏らに代表されるように世界人論のサブ・カテゴリーとしての日本人論構築を目指す動きもあり、⁴¹そこでは、日本を相対化し、礼賛論、蔑視論を突き破ることが意図され、そうした作業の概要も展開されつつある。⁴²

だがしかし、杉本氏らが主張するように、日本研究とか比較研究の持つ本当の意義が、あくまでも各社会の共通性を基盤に据えるべきであるとしても、日本には日本の固有の「かたち」があることもこれまた事実である。であるならば、日本社会の無意識の深層とも言うべきふところ深くに内包された日本独自の特質を明らかにせずには、あらわれた形を解明することも不可能となろう。丸山真男氏が、日本文化を捉える視角として、「特殊性」ではなく「固体性」の相において捉えたらどうかと論ずる意味もこの辺りであろうと了解できる。⁴³つまり杉本氏の指摘する様々な知識社会学の一般的命題、即ち日本像が見る角度によって千変万化の様相を見せるという問題以上にやはり景観そのもの（日本社会）に内在するものを明らかにすることが重要となろう。

さらに付記すべきは、日本社会に内在する固有の統合原理とも称せられるものを普遍的な言語で語ることであろう。例えば、演劇学という異質な領域に身を置きながら、日本社会の国際的的定位とも言うべき問題について積極的発言を続ける山崎正和氏は、日本における「柔らかな個人主義」の誕生を論じ、それに基づいた、脱産業化を生きる知恵を普遍的な言語で語ることが我々に課せられた課題であると論ずる。それは「かつて西洋が産業化を最初に経験して、その経験をひとつの哲学として伝えたように、…中略…日本の経験を世界の『時代精神』として語ることであるが、それだけの思想的表現力が持てるかどうか、次の世紀の日本の国際的地位を決定するであろう」⁴⁴という指摘へと続く。そしてこの問題意識は、例えば矢野暢氏の「普遍言語国家」⁴⁵への模索への提言と連動する。

さて、いずれにせよ特殊的日本論に違和感を抱き、日本論に流れるイデオロギー性を明らかにしようとする日本研究の研究者たちへ一定の共感を示すとすれば、ここで日本という固有社会・固有文化の内側に深く斬り込む形での新たな日本人論構築へ向け一步を踏み出す以外に道はない。その場合、次の2つの視点が重要となろう。第1点、日本論に時間性と空間性を含むこと。つまり日本社会の持つ歴史性と地理的制約を無視しないこと。第2点、分析の対象となるものが日本であるというだけでなく、また対象を認識する枠組み、方法において単純に西欧で発達した種々のモデルを日本に適応するばかりでなく、そのモデル・枠組みそのものを創出すること。このような問題意識の中で日本人論の再構築を目指すさいに、政治学の立場から日本社会への新たな接近をはかる神島二郎氏の業績に注目せざるを得ない。

一般に神島氏の研究は丸山政治学と柳田民族学を架橋することにあっただと言われているが、それは神島氏自身の言葉を借りれば、「柳田氏には情報の組織化において、丸山氏には問題の組織化において」⁴⁶負うところがあっただということにある。そうした神島日本学の日本認識はどのような体系を持つのだろうか。

第1に、氏の日本論の前提は日本社会を単一民族・単一文化性ではなく、むしろ雑居性・多様性をより明確な姿として捉えていることだと考えられる。雑居性として日本社会・

日本文化を捉えるという視点は、言うまでもなく加藤周一氏の「雑種文化」⁴⁷によって強力に論じられたが、神島氏もまたこの加藤論文を重要な画期と見る。⁴⁸しかし神島氏の明確にしたい日本の雑居性・雑種性とは、民族や階級が同質集団としてそのまま複数に含まれている社会ではなく、「民族が個体にまでバラバラにされ、文化の部分にまでバラバラにされて雑居混淆する傾向が強く、雑居混淆が家族のなかにまで及ぼされ、文化もその体系性を失うまでにいたっている」⁴⁹という雑居性なのである。つまり日本の雑居性は、通常言われるところの意味（階級社会ないしはモザイク社会）での異質社会ではないが、雑居・混淆・雑種化が進んでいる点で、同質社会でもないのである。

神島氏の問題とするのは、こうした雑居性の濃厚な日本社会が、なぜおだやかで、まとまりが良いのかという点にあり、氏はこれを説明する方法として、個我の自覚に欠けているとか、集団主義が根強いとかと指摘するだけではあまりにも安易にすぎないかという議論を展開する。神島氏によれば、そうした安易な視角からの日本人論が連綿として続いてきたのは、日本人自身が自画像の把握に、つまり日本社会の客観的把握に常に失敗してきた証左なのである。即ち、日本の特殊性の強調は、その非力をとりつくろうものとしてあったと理解すべきであろう。⁵⁰であるならば、今日、日本人論、日本文化論、日本社会論に求められているのは「これまでのような安易な決めこみのくりかえしではなく、一つにはその多元性・多様性・雑居性をよりふかく究明することであり、いま一つは、それにもかかわらず、比較的まとまりがよいのはなぜかということ問うこと、そしてそこに埋もれていた処世と人あつかいのノウハウを掘り起こし、それを普遍化する」⁵¹ことであろう。

こうして、日本式社会統営の姿を究明する中で、神島氏は既成の政治学を解体し、再構築する必要を感じ、新しい政治理論の整備を人心という問題にかかわる中から行おうとする。氏は、あくまでも日本の現実の中から、日本語を通して、普遍的な政治理論を構築せんと意欲し、普遍的な政治理論の展開を説くデービッド・イーストンに対して「あなたが試みているのは英語を通してであるから、英語文化の制約をまぬかれないはずである。そこで私は日本語を通して普遍的な政治理論を構築したいと思っている」と述べ、さらに「日本の政治学は明治以来、あなたの国を含めて欧米の御厄介になったが、いただくばかりが能ではないから、いずれお返しをしたいと考えている」⁵²と発言した。

こうした作業の中で氏は〈ハードな支配〉と〈ソフトな支配〉という着想に到り、そこにおける基本原理の抽出とその組み合わせを展開することによって、日本の政治の姿が明らかになるのではなかろうかと考える。『政治の世界』『人心の政治学』『政治を見る眼』等の著書に展開されるそうした諸理論の個々の内容については、ここでは立ち入ることは避けるが、その枠組みについて簡単に論ずれば、次のようになろうか。

第1に、日本社会の成り立ちに係る理論の提示がある。神島氏が日本社会を雑居性の社会として規定することは前に述べたが、そこではまず馴化というプロセスによって異質な価値を定着させるという点が注目されよう。即ち欧米社会における文化形成・発展のプロセスには異化作用とも称せられる力が働くのに対して、日本における馴化は無階級的な雑居社会を生み出すと考えられる。⁵³

ついで神島氏は、実際に雑居社会を統営する政治の姿に光をあてる。ここでも彼は欧米の政治学の中で体系化された政治の諸要素、社会統営の方法の観察・理論から一步視点を離し、下記のごとく政治的まとめの諸原理を提示し、日本の政治的営みをそれらの組み合

せの中で解くことを企てる。それらの原理とは即ち、〈闘争〉原理、〈支配〉原理、〈自活〉原理、〈同化〉原理、〈カルマ〉原理、及び〈帰嚮〉原理である。⁵⁴

氏はさらに眼を転じ、明治以降の日本社会の全体的展開、つまり日本の近代化の構造についても独自のアプローチを示し、欧米でステレオタイプ化された日本論とは全く逆に、日本の近代化のプロセスが単身者化のプロセスであったと考え、それとの関連で「第一の村・第二の村」、「出世民主主義」「ステイタス・デモクラシー」という興味深い分析の切り口を示してみせる。

神島氏独自のこれらの諸概念に関する考察は別に行うとして、彼が日本社会、あるいは日本の近代化というような大きなテーマに立ち向うとき、意欲的に非西欧的分析の枠組みの創出に取り組んでいる態度は、格別な評価にあたいするであろう。筆者は、このような試みの中から、これまでのステレオタイプ化された内外の日本論を乗り越え、日本社会の固有性を明らかにする道が拓かれてくるという強い予感を持っている。

IV 結 語

冒頭に述べたごとく、筆者の問題意識は日本をいかに把握し、それを（特に非日本社会に向けて）説明してゆくかにある。この点については筆者自身の海外体験の中でつねにその必要性を痛感させられてきた。そもそも対象の理解に関しては、対象（この場合日本社会）に向い合う観察者の側にその契機と必然性が第一義的には存在するとしても、国際社会における現在の日本の立場と状況を考えると、我々の側からの我々自身についての解明と説明の努力もまた急務ではなかろうか。特に意識的あるいは無意識的なイデオロギー性を含む内外の日本論の氾濫の最中であって、その意義は一層強調されうるのである。

ところで我々にとっての緊急な課題は、日本社会解明の方法論であろう。そのさい、杉本氏らの試みる世界人論のサブカテゴリーの中での日本人論という壮大な作業に期待する一方、筆者としては同時に、時間性・空間性のダイナミズムの中で展開する日本社会自体の持つ固有性の解明をそうした世界人論に連繫させなければならないと考える。そこにおいて重要な点は、日本社会に的確な光をあてる固有な方法論を展開しうるか、そしてそれが、たんなる固有性論議にとどまらず、例えば世界人論の構築、あるいはその方法論そのものにも何がしかの影響を与えうるか否か、ということにあるとは言えないだろうか。それは同時に、国際社会にあって、ともすれば心理的孤立感を抱かざるをえない状況に置かれる我々日本人自身にとっての重要関心事でなければならぬ。

注

1) 杉本良夫氏は『日本人は日本的か』東洋経済新報社、p.13-14の中で、野村総合研究所の研究報告を紹介し、日本人論と呼ばれるジャンルに入る書籍や論文などの出版物が1946年から1978年の間に約700点市場に出まわったことを指摘しその内容区分を示している。

2) Herman Kahn, *The Japanese Challenge: The Success or Failure*. その他

3) Ezra F. Vogel, *Japan as Number One*.

- 4) William G. Ouchi, *Theory-Z*.
- 5) 例えば R.C. Christopher, *The Japanese Mind*.
- 6) 例えば M.J. Wolf, *The Japanese Conspiracy*.
- 7) 例えば日米間の経済摩擦問題をイメージ・ギャップ、ないしは「誤解」という角度から捉え、その具体例を考察する作業は様々な場面で行なわれているが、日本経済新聞社前ニューヨーク支局長宮智宗七氏の「日米誤解の構図」(『日本経済新聞』1982年11月に7回にわたり連載された)は具体的な誤解の持つ意味を浮き彫りにしている。
- 8) 日本の民間人チームで構成する対米広報使節団「Japan Caravan」は、その1ヶ月強に及ぶ全米行脚の旅を終え、New YorkのJapan Societyにおける総括討論集会(1983年6月、筆者も参加)でこの問題を探り上げ団員の一人は、Unfairnessという語義にまつわる概念的相違の究明の緊急性を指摘した。
- 9) 情報の寡占体制についての議論はUNESCOを中心とする国連諸機関で継続的になされているが、1983年9月、東京で行なわれた「The World Communications Conference」においてもその第三分科会で採り上げられた。この中では、日本側参加者の永井道雄氏の「日本は情報の南北問題という観点からは、単純に北側に属するとは言えない」という指摘が注目された。
- 10) 世界各国における日本観の比較研究という作業も本格的に着手されるべき時期にきていると言えよう。尚、その第一歩として、『どう映っているか日本の姿——世界の教科書から』日本放送出版協会 1984. は注目に値する。
- 11) 「世界コミュニケーション会議」(注9)において、永井氏は情報における日米の不均衡を指摘し、例として、『朝日新聞』と *New York Times* における、お互いの相手国に関する報道の量的比率が約10対1であることを指摘した。
- 12) 日本人論を概観し、その系譜について総括的に論ずることは、ここでの主題ではないのだが、下記著書が参考となろう。
 - a. 佐橋 滋編『日本人論の検証—現代日本社会研究—』。特にその序 p.13-41に展開される、田崎篤郎氏の論文。氏はその中で「群盲象をなでる」(宮城音弥氏) 感の強い日本人論の区分け分類を行うと同時に、日本人論の社会的機能の検討の必要性を明らかにする。
 - b. 南 博『日本人論の系譜』
 - c. 『日本人は日本的か』東洋経済新報社等、一連の杉本良夫、ロス・マオア氏等による著書。杉本氏等は、日本論の知識社会学的アプローチを展開する。
- 13) ドナルド・キーン「第三世代の日米研究者たち」『リーダーズダイジェスト』1984年4月号。
- 14) 米国におけるジャパノロジーの歴史的発達については『米国における日本研究』国際交流基金。p.30-51の細谷千博氏の論文参照。
- 15) その中に含まれる人々は、例えば、G・アストン、ジル・ホール、チェンバレン、G・サムソン、A・ウェーリー等と並ぶ。
- 16) キーン氏論文(注13) p.96及び、池田雅之氏論文「日本人論の系譜」『正論』1984年2月号、p.81。
- 17) キーン氏論文(注13) p.96。
- 18) 同上 p.98。

- 19) キーン氏論文
- 20) 永井陽之助「日本にこだわらない日本論を——日本的例外主義の終焉——」『中央公論』1984年5月号。
- 21) 西尾幹二氏の『中央公論』誌上における一連の発言は、「近代日本とは何か」『中央公論』1982年12月号に始まり、83年1月号、84年2月号、そして「身構える西欧的自尊心——日欧文化摩擦異聞——」84年7月号へと続く。
- 22) この点については、杉本良夫『日本人は日本的か』（注12.c）のp.59参照。
- 23) 前出 永井論文（注20）p.59.
- 24) 同上 p.26.
- 25) 永井氏は、具体的な例として、テレビ番組「将軍」や、E・ウィルキンソン氏の著『誤解』をあげながら、本論文（注21）で西と東の固定イメージについて論じ、その固定イメージが、『菊と刀』以来今日まで、連綿として続いていることを指摘する。
- 26) 同上 永井論文 p.27.
- 27) 池田雅之氏論文「逆しまの異境——〈日本〉イメージの淵源」『現代思想』1984年7月号、p.318-325.
- 28) 同上 p.323.
- 29) 前出、西尾氏の一連の論文（注21）
- 30) 自文化中心主義的発想で日本に接したアメリカ人の率直な手記・手紙等を収めた『アメリカ人の日本論』アメリカ古典文庫22、研究社 1975. は彼らの本音を見事に浮き彫りにしている。特に当時（19C後半）のアメリカ有数の知的・政治的名門出身の、ヘンリー・アダムスの書簡は興味深い。（例えば日本女性についての彼の感想 p.104）
- 31) C.D. Lummis、加地永都子訳『「菊と刀」再考』（*The New Look at the Chrysanthemum and the Sword*）時事通信社、p.104.
- 32) 同上 p.149.
- 33) 同上
- 34) 同上
- 35) 同上 p.155.
- 36) 同上 p.171.
- 37) 同上 p.190.
- 38) E. Wilkinson, *Misunderstanding Europe v.s. Japan*.
- 39) 『「菊と刀」再考』 p.190.
- 40) 前出 永井論文（注20）p.61.
- 41) 『思想の科学』——日本人論の落とし穴——1984年2月号 p.4.
- 42) 同上 p.20.
- 43) 武田清子編『日本文化のかくれた形』岩波書店、丸山真男氏発言の部分 p.129.
- 44) 『朝日新聞』1984年1月9日「いま日本が問われているもの」
- 45) 矢野 暢『劇場国家日本』 p.244.
- 46) 神島二郎『天皇制の政治学』 p.229 その他においても同様な氏自身の学問方法論についての言及がある。
- 47) 加藤周一『「雑種文化」——日本の小さな希望』

- 48) 神島二郎『政治を見る眼』 p.56.
- 49) 神島二郎「多元性・多様性・雑居性を究明する日本論を」『朝日ジャーナル』1983年12月号 p.51.
- 50) 同上 p.50.
- 51) 同上 p.51.
- 52) 神島二郎『磁場の政治学——政治を動かすもの——』 p.244.
- 53) “馴成社会”と“異成社会”については『政治を見る眼』 p.54-62等において論じられている。
- 54) 神島二郎『政治の世界』及び『政治を見る眼』その他の著書において論じられている。

SUMMARY

Beyond the Particularism Approach to Japan

Masaru ISHIZUMI

Japan is no longer viewed abroad as a “rising sun.” She is increasingly perceived as a “risen sun.” This is evident from the extensive coverage of the country in the foreign mass media and from the number of scholarly publications devoted to the study of Japan. In recent years, much foreign literature on Japan has focused on the alleged collective nature of Japanese society (Japan Incorporated) and on the growing economic friction between Japan and several of its major trading partners. In this context, the way in which Japan is portrayed has considerable economic and political importance.

The major purpose of this paper is to examine the ideological assumptions hidden in some major foreign works on Japan and to consider alternative and, possibly, more valid ways of looking at Japanese society. The paper is divided into four parts.

The first part discusses the recent research into Japanese Studies undertaken by such scholars as Y.Sugimoto, M.Ikeda, and C.D.Lummis. Here, I indicate my general agreement with the views (strongly held by these scholars) that the emphasis on Japan’s uniqueness, hitherto characteristic of most Japanese and foreign research, needs to be thoroughly reexamined. In this connection, however, the recent appearance of a small body of literature which rejects the unconscious re-production and reconfirmation of the “unique and exotic” stereotypes should be noted.

Part two reviews the arguments presented by C.D.Lummis in his *New Look at the Chrysanthemum and the Sword*. *The Chrysanthemum and the Sword* is still regarded by many as an unchallenged classic among both writers and the students of Japanese studies. Following his argument, I attempt to lay

bare the ideological assumptions of Ruth Benedict's famous work. These assumptions continue to form the basis for the perceptions of Japan as a unique, collective and, to enlightened Americans and even to some Japanese, ultimately unacceptable culture.

Part three discusses possible new approaches to the description and analysis of Japanese society. Here I argue that to simply place Japan within the universalistic framework of global socio-anthropological studies, will not in itself solve all our problems. This is in no way to deny the important contributions made by the students of the literature on Japanese society. Methodologies, however, tend to be value laden and it is by no means clear that the cognitive frameworks of the modern western social sciences can be applied with equal effectiveness to the study of all peoples at all times and in all places. Rather, the task of the serious social scientists is to understand the inherent characteristics of these complex societies using cognitive frameworks that can be derived from within. In this context, I find the political scientist J.Kamishima's dynamic approach to the study of Japanese society highly suggestive, although I do not discuss in this paper his key concepts such as "hard rule and soft rule," "familiarization process and strangerization," "status democracy and opinion democracy," "first village and second village."

Finally, reflecting on my own personal experience of international society, particularly at the U.N., I stress the urgent importance first, of reconstructing the frameworks for the analysis of Japanese society, and second, of portraying Japan to non-Japanese audiences in such a way as to avoid possible psychological isolationism on the part of the Japanese people themselves.